

おさくの話

小川未明

青空文庫

おさくは、貧しい家に生まれましたから、小学校を卒業すると、すぐに、奉公に出なければなりませんでした。

「なに、私が、いいところへ世話をしてやる。」と、植木屋のおじいさんはいいました。

彼女の父親は、とうに死んでしまつて、あわれな母親と暮らしてきました。おじ

いさんは、しんせつな人であつて、なにかに、二人を気にかけてくれたのであります。

「工場へゆくよりか、夜は、勉強でもさしてください、どこかしんせつのお家がいい

と、おじいさんは心配していただくのだから、見つかつて、そのお家へいったら、

よくいっつけを守つて、働かなけりやならないよ。」と、お母さんは、いいました。

「お母さん、きつと、よく働きます。どうか、心配なさらんでください。」と、おさく

は、目に、いっぱい涙をためて答えました。

「ああ、おまえが、その決心なら、お母さんは心配しません。」

こう、母親は、いったものの、これまで長い間、二人は、むつまじく、朝晩、顔を

見合つて、暮らしてきたのに、この後は、べつべつに生活しなければならぬと知ると、

なんとなくさびしくなりました。しかし、どうせ、娘は、一度は世の中に出なければなら

ない運命であると考えたと、こんなに気を弱くしてはしかたがないと、強いて、元気を
つくっていました。

それから、間のないことであります。

「おさくちやんのいく、いいところが見つかったぞ。」といって、おじいさんは、ある日
の晩方、機嫌よく、外からはいつてきました。

「まあ、おじいさん、それは、どうもありがとうございます。」と、母親は、いつて、
おじいさんを迎えました。が、うれしいうちにも、いよいよかわいい娘に別れなければなら
ぬ日がきたかと思うと、悲しさが、胸いっぱいになりました。しかし、それを押さえつけ
て、顔にあらわすまいとして、母親は、にこにこ笑いながら、

「ほんとうに、いろいろ心配くださいまして、すみません。」といって、おじいさんの
話に、耳を傾けたのです。

おさくは、だまって、母親と並んですわり、自分の世話されてゆくところは、どんな
ところだろう……。自分みたいなものにとまるかしらん？ なんとなく、うれしいよう
な、悲しいような気持ちを抱いて、目をかがやかしながら、おじいさんの顔を見つめてい
ました。

「あちらさまは、もののわかたつたお方だから、正直につとめさえすれば、長く、めんどうをみてくださるにちがいない。べつに、したくはいらない、ほんの身のまわりのものだけ、まとめておきなさい。明日の朝、わしが迎えにきて、連れてゆくから……。」

と、おじいさんは、ねんごろに告げました。
 やがて、おじいさんは、帰りました。その晩は、母親と娘が、名残惜しそうに、語り明かしたのでした。

おじいさんは、約束どおり、朝になると、じきにやってきました。そこで、おもしろいことをいって、二人を笑わせたり、元気づけたりしました。

「二時間とかからない街の中だ。たまには、ちよつとお暇をもらって、顔を見にくるがいい。さあ、したくがいいなら出かけるとしよう。」

目を赤くした娘をつれて、おじいさんは、出かけました。母親は、独り残されて、出てゆく娘のうしろ姿を見送っていました。

おじいさんは、おさくを静かな高台の門のある家につれてきました。この屋敷へは、おじいさんが、ときどき、植木の手入れにくるのであります。

「まだ、なにも知らない子供で、たいしたお役にもたちますまいが、どうぞ、よろしくお

願ねがいいたします。性せい質しつは、正しょう直じきで、いたって、きつぱりしてはいますが、すこし勝かち気きですから、そんなところも、お含ふくみおきくださいまして、よろしくお世せ話わいただきとうぞんじます。」と、おじいさんは、おさくの方ほうを見みかえって、ていねいに、奥おくさまに對たいして、頭あたまを下さげました。おさくも、ただ、顔かおを真まつ赤かにして、おじいさんについて、頭あたまを下さげたのであります。

「いや、そういう子こなら、わたしは好すきですから、せいぜいめんどうをみますよ。帰かえつたら、この子このお母かあさんによろしくいつてください。」と、やさしそうな奥おくさまは、いわれました。

話はなしは、こういうようにして、まとまりました。それから、二ふた月つきあまりもたつてからで
す。

ある日ひのこと、おさくが、廊ろう下かのそうじをしていると、坊ぼっちゃんのほうの室しつで、電でん球きゅうの破は裂れしたときのような、すさまじい音おとがしました。

彼かの女じよは、なんだろうと驚おどろいて、すぐについてみました。すると、そこには、十二と九つになる、二ふた人たりの坊ぼっちゃんがいて、おさくが、あわててはいつてきたのを見みて、おかしがつて笑わらっていました。

「坊ちやま、いまのは、なんの音でございますか。」と、たずねた。

「地雷火が、爆烈したんだ。」と、九つになる、坊ちやんがいました。

「あの音かい、電燈の球が破れたのさ。」と、十二になる坊ちやんが、まことしやかに答えました。

彼女は、それらしいようすもなかったけれど、目を円くして、

「まあ、あぶのうございますこと。」といつて、あたりを見まわしました。しかし、べつに、ガラスの破片が飛んでいる気はしなかつたので、そうでないとわかつたから、そのま
まあちらへゆこうとしたのです。

「おい、もう一度、してみせようか？」

二人の坊ちやんは、そういつて、彼女を呼びとめました。おさくは、なんの音だろう
と思つたので、いわるるまま、そこに立ち止まつて、二人の坊ちやんがたのすることを見
ていました。

「こんどは、僕の番だよ。どちらの音が、大きいか、やりっこをしようね。」

そういつて、弟のほうは、ポケットから、三日月形に折りたたんだ、紙製の風船球
を取り出して、空気をいれるべく、吹きました。見るうちに、風船球は、ふくれあがつ

て、小さな掌の上にころがりました。

「おさく、見ておいで、いいかい。」といつて、右の掌に、力いっぱい入れて、ふいに、風船球をたたきつぶすと、さすがに、すきまなく張られているだけに、紙の球は、ひどい音とともに、さんざんに裂けて、掌の上に残ったのであります。

「どうだい、僕のほうが、大きい音がしたろう。」と、小さな坊ちゃんは、誇らしげにいました。

「よし、そんなら、こんど、おれがする番だよ。」

上の坊ちゃんは、自分も、新しい風船球を取り出しました。これを見て、おさくは、二度、びつくりしたのであります。

「坊ちやまがたは、こんな遊びをするばかりに、新しい風船球をいくつも買っていたら、たのだらうか？」

こう彼女は、思うと、だまって見ていられない気がしました。

「坊ちやま、およしあそばせ。」と、彼女は、いった。

「なぜだい、僕たちのかつてじやないか。」

「兄さん、お母さんといっしょにいつて、僕たちが買ってもらったんだね。」

ふたり 二人の坊ちゃんは、彼女の干渉を気持ちよく思いませんでした。

「だって、もつたいないのですもの……。」と、おさくはいつた。

ふたり 二人の少年は、これまで、女中などに、こんな注意がましいことをいわれた、経験をもつていませんでした。

「兄さん、僕たちが、なにをしたつて、いらんお世話だねえ。おまえ、もう、ここにおらなくていいから、あつちへゆけよ。」と、小さい坊ちゃんがいました。

「こんなものについて遊べんから、大きな音を出そうと思つていたのだよ。こんなものを破つたつて、なにがもつたいない？」と、大きな坊ちゃんは、いいわけがましく答えました。

おさくは、りくつをいわれると、もう、これに答えることができなくなつて、目に涙がにじみました。

「もつたいないことする人は、ばかですわ。」といつて、あちらへ去りました。

ふたり 二人の少年は、たちまち顔の色が、変わりました。

「ばかだといつたな！」と、兄が立ち上がった。

「生意気だね、お母さんに、いいつけておやりよ。」と、弟も、つづいて立ち上がると、

もう風船球のことなどは忘れて、二人は、廊下を駈けて、彼女のいった後を追い
ました。

日ごろは、女中に対して、やさしい、いい奥さまでしたけれど、この日ばかりは、
怖ろしい奥さまに見えました。そして、厳格な言葉つきで、

「おまえが、ほんとうに、坊ちゃんたちに、ばかだなんて、失礼なことをいったなら、
悪かったといつて、おあやまりなさい。」といわれました。

おさくは、うつむいて、目にいっぱい涙をたたえていました。けれど、どうしても、す
なおに、自分が悪かったといつて、わびる気になれないものがありました。

「自分のいったことは、まちがっていたらどうか?」……彼女は、こんなことを頭の中
で考えていました。

「悪いと思つたら、はやく、あやまるものですよ。」と、奥さまが、つづけさまに、やや
大きな声でいわれた。

このとき、おさくの目に、哀れな自分の母が下を向いて、熱心に、風船球を内
職に張っている姿が浮かびました。朝早くから仕事にかかり、夜おそくなるまでしても、
きめてある数までは、容易にできなかつた。それに、まだ慣れないうちは、糊がよくつい

ていないといつて、問屋とんやに持つていつてから、母ははは、小言こごとを聞かされて、しおしおと帰かえつてきたこともあります。そのときのようすなどが目にうつると、日ひごろから、一つの風ふうせ船球んだまにも、貧しい人たちの並なみならぬ勞力ろうりよくが、かかっていると思おもつた。自分の考かんがえは正しいので、それをそうとも思おもわぬほうが、なんといつてもまちがっているのだと思おもわれたのでした。

おさくは、そんなことから、とうとう暇ひまを出だされてしまいました。

「あんまり、強情ごうじょうを張はるものでない。あんないいお家うちを、お暇ひまなんか取とらなくてもよかつたのだ。」と、植木屋うえきやのおじいさんが、いつたときに、彼女かのじよは、お母かあさんが、あれほど、苦心くしんして、風船球ふうせんだまを張はつていられたのを知るだけに、なんの思おもいやりもなく、たき破やぶるのを見みると、つい我慢がまんがしきれなくなつて、失礼しつれいなことをいつたり、また考かんがえると、くやしくなつてきて、つい強情ごうじょうを通とおす氣きになつたことも、おじいさんに物もの語がつたのでした。

「おまえが、いうことは、ほんとうのことだけれど、強情ごうじょうはよくないことだ。正しいことはいつか、後あとでわかるときがあるのだから……。」と、おじいさんは、おさくをさとしました。

おさくは、その後は、工場へ行って、働くことになりました。そして、お母さんに、孝行をしました。

植木屋のおじいさんは、しばらくたつてから、おさくの奉公した、お家へ行って、植木の手入れをしていました。そのとき、奥さまは、出てこられて、おじいさんに、

「あの娘は、どうしました？ 正直ない子だったけれど、すこし強情のようでしたね……。」といわれて、

「あの娘のような考えをもつ子は、正しいのです。あの後でできた女中などは、ものを壊すと、しかられないうちに、『これを壊しましたから、私が、弁償します。』というのです。買って、返しさえすれば、なにをしてもそれですむという、ああいう考えをもつ子には、まことに困ったものです。」と、話されたのであります。

おじいさんは、縁側に腰を下ろして、きせるに火をつけて吹かしながら、

「じつは、あの子の母親が、内職に、風船球を張っていましたので……。」と語りますと、やさしい奥さまは、いくたびもうなずいて、目に涙をためて聞いていられた。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月

初出：「教育研究」

1929（昭和4）年10月

※表題は底本では、「おさくの話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おさくの話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>